ちかまつうるる読本

ザ・近松（ちかまつ）

第二巻 近松を知る

鯖江発

はじめに

私、『ちかもんくん』こと、近松門左衛門です。本名は杉森信盛と申します。私は、福井に生まれ、三歳のころから、十年あまりを鯖江で過ごしておりました。今でも鯖江の山々や日野川の流れ、吉江城下の静かなたたずまいをあざやかに記憶しております。青年時代に京都にまいり、ここで文学を勉強し、浄瑠璃や歌舞伎の作品を書くようになりました。

皆さんは、私のことを元禄の三大文豪とか東洋のシェークスピアといってくださいますが、私の文学には少年時代を過ごした鯖江の豊かな自然や人情というものが深くかかわっているのです。ですから鯖江は私にとって、たいへん思い出深い大切なところです。

このたび、ふるさと鯖江の皆さんに『ちかまつうるる読本』「近松を知る」を発刊していただきました。この本には、私のおいたちからはじまり、私を支えてくださった人々や時代背景などがわかりやすく記(しる)されており、「近松」についてあまりご存知ない方にもやさしく読んでいただけます。

私が生まれて三四八年。私についての本がまた一冊発刊されましたことをうれしく思います。

この本が多くの皆さんに読んでいただけることを願っております。

ちかまつ

目次

はじめに

第一章　近松の生涯①　鯖江での少年時代 ―― 1

一、おいたち
二、福井藩と吉江藩
三、育ったまち吉江
四、幸若舞
五、京都への旅立ち

第二章　近松の生涯②　京都・大坂での活躍 ―― 9

一、公家奉公
二、浄瑠璃作者としての出発
三、歌舞伎作者としての活躍
四、晩年

第三章　近松の生きた時代 ―― 19

一、江戸時代の幕開け
二、元禄時代と元禄文化

三、三大文豪の活躍
四、人形浄瑠璃と歌舞伎
第四章　近松をめぐる人々 ―― 29
一、一条禅閤恵観
二、正親町公通
三、宇治加賀掾
四、竹本義太夫
五、辰松八郎兵衛
六、竹田出雲
七、坂田藤十郎
特別寄稿
近松ってどんな人？ ―― 37
園田学園女子大学近松研究所
近松を知るために ―― 41
近松関連年表 ―― 45
あとがき

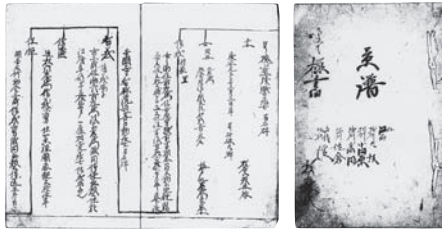
第一章　近松の生涯①　鯖江での少年時代

一、おいたち

文豪近松門左衛門の本名は杉森信盛。承応二年（一六五三）、越前（現在の福井県）の吉江藩士・杉森信義の次男として誕生しました。小さい頃の呼び名は次郎吉といいました。

父の信義は、第三代福井藩主・松平忠昌に仕えていました。正保二年（一六四五）忠昌が亡くなり、三男の福松君が吉江藩主となると、福松君に従って、吉江藩士となりました。その時、福松君はまだ五歳（数え年で六歳）だったので、彼が元服（男子が成人となったことを祝す儀式）するまではそのまま福井に住んでいたようです。

次郎吉（後の近松）は、その間に生まれています。



杉森家系譜（杉森唯智氏所蔵）

承応元年（一六五二）、十二歳（数え年で十三歳）で元服した福松君は昌親と名のり、明暦元年（一六五五）、四十七名の家来と一緒に吉江の地にやってきました。その時に杉森一家も吉江に移ってきたと思われます。近松二歳（数え年で三歳）の時でした。

それから十数年間、近松は吉江藩士の子としてこの鯖江で過ごすのです。父信義は禄高（年俸）三百石の中級以上の武士でしたので、裕福な家庭であったと思われます。

近松には、兄・市三郎（後は智義と名のる）と、弟・金三郎（後は伊恒と名のる）がいました。他に二人の弟がいたとも言われます。また母は、福井藩医であった岡本為竹の娘・喜里とされていますが、はっきりとはしていません。

吉江町図（松平文庫 松平宗紀氏所蔵 福井県立図書館保管）

二、福井藩と吉江藩

時は、徳川氏の時代です。慶長五年（一六〇〇）、徳川家康の次男・結城秀康が六十八万石の初代福井藩主となります。そして、二代は秀康の長男・忠直、三代は秀康の次男・忠昌と続きます。

正保二年（一六四五）、忠昌が亡くなり、長男・光通が第四代藩主となると、次男・昌勝（幼名仙菊）に松岡五万石、三男・昌親（幼名福松）に吉江二万五千石が分け与えられました。こうして、福井藩の分家として、鯖江に吉江藩が誕生することになったのです。

旧吉江城下のたたずまい

館は現在の鯖江市吉江町に建てられ、領地は丹生郡二十六ヶ村、坂井郡十ヶ村の他全四十四村でした。

延宝二年（一六七四）、第四代福井藩主・光通の死により、昌親が第五代を継ぐことになって吉江藩はなくなります。吉江藩の存続はわずか三十年足らずでした。

廃藩後、館、侍屋敷等はすべて福井に移転されましたが、現在の杉本町西光寺の表門は吉江藩邸の表御門を移したものと言われています。また、街道を挟んで七つの曲がり角があり（七曲り）、城下町の面影を今に残しています。

三、育ったまち吉江

ところで、近松が少年時代を過ごした吉江とはどんな町だったのでしょう。

吉江町は、吉江藩が成立してできた町です。侍屋敷を中心に、新町・西町・本町・東町・柳町などの町人町が形成されました。

昔このあたりは、葦（あし（よし））ど茂（しげ）る こ〓かい がついたと言われるとおり、日野川、大谷の池などの豊かな水と、経ヶ嶽や春慶寺山などの豊かな自然に恵まれていました。日野川を下ると、当時にぎわいを見せていた三国湊に通じ、近松もその光景を目にしたことがあるかもしれません。

また、吉江と隣接した丹生郡西田中（現在の朝日町西田中）には、室町時代から栄えていた幸若舞があります。吉江藩でも、幸若舞は催されただろうと考えられ、父とともに舞に触れる機会もあったでしょう。そして、後の近松に何らかの影響を与えたに違いありません。

大江の幸若舞（鯖江市所蔵）

四、幸若舞

幸若舞とは軍記物語を鼓に合わせて謡い、扇で手のひらを打ちながら舞うものです。

室町時代、桃井幸若丸直詮が、『平家物語』などの軍記物に節をつけて語ったのがはじまりと言われています。晴やかな謡いとおもむき深い舞が、見る人を魅了し、やがて天皇に認められると、桃井家は菊桐の紋章を許されました。その後、越前の西田中に住み、現在の丹生郡朝日町を中心とした領地と幸若の名を

賜りました。

織田信長をはじめ多くの武士に愛され、保護を受けつつ芸を伝えましたが、明治維新とともに滅び、その一派である大江の幸若だけが、福岡県山門郡瀬高町大江で継承されています。また、現在の朝日町では、子孫により関係資料が残されています。

幸若舞は、浄瑠璃や歌舞伎をはじめ、後の芸能や文学に影響を与えたといわれています。

五、京都への旅立ち

杉森一家が、吉江藩主・昌親に伴い吉江に移ってから十数年の後、父・信義は突然藩を離れます。その時期ははっきりわかっていませんが、杉森本家（石川県加賀市）に残されている親類書（今の戸籍みたいなもの）の控えに、寛文四年（一六六四）、信義が吉江藩にいたことが記されていますから、それ以降のことになります。

ところで、信義の長男智義は織田長頼に仕え、三男伊恒は織田長頼の侍医平井自安の養子（要安、後岡本一抱を名のり高名な医者となります。）となっていますが、近松は仕官の機会に恵まれず、父母と他の弟とともに京都に移ることになります。当時京都は庶民を中心とした文化面において活発な町でした。

父の浪人という経験が、近松の将来にとっては、思いがけない道を開くきっかけとなったのです。

第二章 近松の生涯② 京都・大坂での活躍

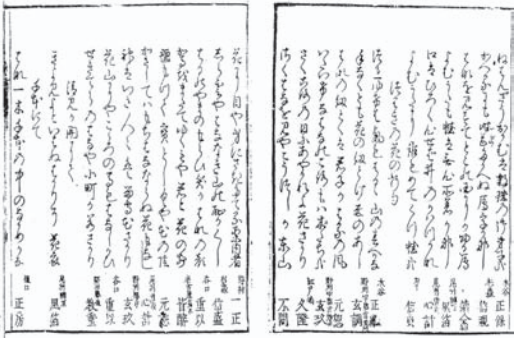
一、公家奉公

吉江から京都に移り住むようになった近松は、やがて独立して生計を立てなければならなくなります。杉森家は、武家でも上級の家柄でしたが、彼の父はすでに浪人していましたから、武士として世にでることは不可能でした。

そこで、公家奉公に出ることになりました。近松は、はじめ一条禅閤恵観に仕えていましたが、近松が十九歳（数え年で二十歳）のとき、恵観が亡くなり、その後、正親町公通、阿野実藤、町尻兼量などの公家に仕えました。当時公家の間では人形浄瑠璃が愛好されており、幼い時に幸若舞を見てきた近松にとって、こうした公家文化は興味深いものでした。

俳句や古典の教養も深めていきました。寛文十一年（一六七一）に出版された

山岡元隣の俳句集『宝蔵』に曽祖父・父母・弟とともに杉森信盛（近松）の句「白雲や花なき山の恥かくし」が載っています。



『宝蔵』（天理図書館所蔵）

また、近江（現在の滋賀県）の三井寺高観音の近松寺に遊学したとも伝えられます。この時期は、近松が人形浄瑠璃の作者として巣立つための準備の時期であったといえます。

二、浄瑠璃作者としての出発

近松は二十歳代の早い頃に公家奉公をやめ、芝居の世界に入っていきます。そのきっかけとなったのは、当時京都の人形浄瑠璃界で新しい世界を確立した宇治加賀掾との出会いです。宇治加賀掾は、京都四条河原に芝居小屋「宇治座」を創設した人物で、近松より十八歳年上でした。

近松は宇治座に出入りし、本格的な作者修業を行いました。この期間は、加賀掾の意図をくんで作品を書く、いわば作者となるべく勉強をしていた下積みの時代といえます。

現在、近松作品として知られている最も古い確かな作品は、天和三年（一六八三）の人形浄瑠璃の脚本『世継曽我』です。この時、近松は三十歳（数え年で三十一歳）でした。この作品は大きな評判を呼び、貞享元年（一六八四）に竹本義太夫も語りますが、同じく町中の評判となりました。その翌年、義太夫が近松に

執筆を依頼して上演した『出世景清』以後、義太夫節が確立されていきます。

その後貞享三年（一六八六）、近松三十三歳（数え年で三十四歳）の時の作品『佐々木大鑑』ではじめて「作者近松門左衛門」と記しています。今なら作者名を書くのはあたりまえですが、当時作者は影の存在で、名前を名のるという事はなかったので大変非難を受けました。しかし、近松はこうして劇作家としての自分をアピールしていくようになります。

近松の浄瑠璃本（鯖江市資料館所蔵）

ところで、「近松門左衛門」という名前、いわゆるペンネームはどうして付けられたのでしょう。一説ですが、まず「近松」について、近江の近松寺が、その門前にある関蝉丸神社（音楽芸道の祖神、蝉丸を祭る）の別当寺で、自分も蝉丸を信心し芸

能にたずさわる者であるとの意味から付けられ、そして「門左衛門」は、父の市左衛門、祖父の左門という名前をあわせて称した、という説もあります。

三、歌舞伎作者としての活躍

『傾城壬生大念仏』（大正11年『近松時代風俗展覧会図録』より）

近松は歌舞伎の作品も書いています。現在知られている最も古い作品は、元禄六年（一六九三）の『仏母摩耶山開帳』ですが、同八年（一六九五）十一月の『姫蔵大黒柱』以降、坂田藤十郎との提携が強くなっていきます。近松四十二歳（数え年で四十三歳）のときです。

近松が、歌舞伎作者として力をいれるようになったのは、歌舞伎が新しい魅力を持つ演劇であると考えたからです。また、坂田藤十郎の芸術性の高さが、近松を引きつ

けたとも考えられています。

しかし、宝永（一七〇四～一七一一）のはじめころから藤十郎は病気がちになります。晩年は弁舌も容貌も衰えが見え、以前と同じような人気を保つことが困難になってきました。また、元禄十六年（一七〇三）の浄瑠璃『曽根崎心中』の大当りもあり、歌舞伎における作者の地位に見切りをつけ、近松は歌舞伎を離れ、再び浄瑠璃に専念するようになりました。

なお、近年発見された道外役者金子吉左衛門（金子一高）の元禄十一年（一六九八）の日記に、近松が本名信盛でしばしば登場し、金子と近松とをはじめとする一座での芝居作りの具体的なやりとり・動向をうかがい知ることができます。

四、晩年

近松は宝永二年（一七〇五）五十二歳（数え年で五十三歳）の時、竹本座の専属となって、翌年京都から大坂に移り、数々の名作を残します。

大坂に移ってから、竹本義太夫が亡くなるまでの十年あまりが、もっとも脂の乗り切った時代でした。町人を題材とした作品が多くつくられ、座本竹田出雲の方針を受けて、浄瑠璃にも大仕掛けのからくりなど色々な試みがなされました。

享保九年（一七二四）三月二十一日、大坂大火にあい、妻子とともに仮住まいとなりました。そして、同年十一月二十二日、七十一歳（数え年で七十二歳）で亡くなり、尼崎の広済寺と大坂谷町法妙寺

近松墓石（尼崎市久々知広済寺）

に葬られました（法名は阿耨院穆矣日一具足居士）。

近松は辞世文で、「代々甲冑の家に生まれながら武林を離れ…」と述べています。終生武士の出であることにこだわりつづけ、吉江のことが頭から離れなかったのではないでしょうか。

家族は、子供として多門、景鯉、松屋太右衛門の名が伝えられています。近松の手紙に、多門は堺で座敷襖などの絵の注文を受けて書いていたとありますから、専門の画家であったようです。妻は大坂松屋の出身といわれ、近松没後十年を経た享保十九年（一七三四）に死去しました。七十八歳（数え年で七十九歳）でした。

近松門左衛門肖像（個人蔵）

第三章　近松の生きた時代

一、江戸時代の幕開け

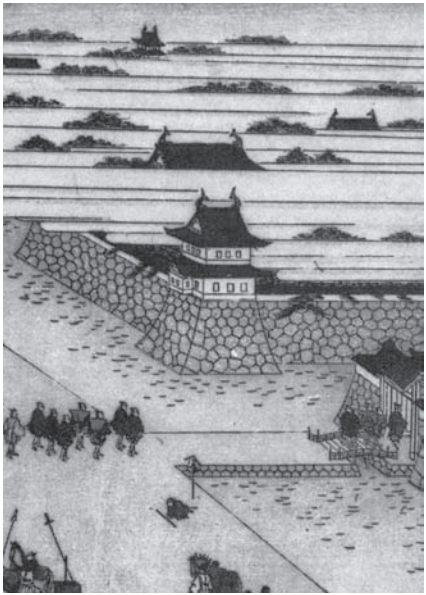
慶長五年（一六〇〇）、関ケ原合戦で勝利をおさめた徳川家康は、同八年（一六〇三）江戸に幕府を開きました。江戸幕府は徳川将軍を頂点におき、中央に幕府、地方に藩をおく政治体制をとり、大名支配のため「武家諸法度」などの法律を発布しました。また、「参勤交代」を強化し、全国の主要な鉱山を支配します。

江戸時代は「士農工商」という言葉で言いあらわされるように、厳しい身分制が確立されていました。「武士の子は武士。農民の子は農民。」といわれたように、身分は固定されていました。

しかし、江戸時代は概して平和な時代でした。大坂夏の陣（一六一五）以降、島原の乱（一六三七）を除いて、幕末にいたるまで内乱（戦争）もなく、およそ二

百六十年余り続きます。

この間、三代将軍家光は「鎖国」を実施し、一部の地域を除き、海外との交易を禁止したため、日本固有の文化が育っていきました。江戸中期になると三都（京都・江戸・大坂）などの大都市を中心に、次第に経済や文化が発展していきました。



『徳川盛世録』より

二、元禄時代と元禄文化

延宝八年（一六八〇）、徳川綱吉が五代将軍となります。日本史では、綱吉の将軍在任期間を「元禄時代」と呼んでいますが、文化史のうえでは、さらにこの在任期間の前後を含めた時期をさす場合もみられます。

元禄時代には、幕府の制度も安定し経済も発展してきました。しかし、この時代には大名などの改易、取り潰しが集中し、また、悪法といわれる「生類憐れみの令」や元禄地震（一七〇三）、富士山の大噴火（一七〇七）、さらに諸国における洪水など自然災害もたびたび発生し、人々を苦しめました。

赤穂浪士の討ち入りのように江戸時代を代表する大事件もみられました。赤穂浪士の討ち入りは、「武士の義理」を貫いたもので、

忠臣蔵「討入」図（鯖江市中野町所蔵）

浄瑠璃や歌舞伎作品の題材にもなっています。

こうした社会情勢のなかにあって、江戸時代の町人は、新たな文化を創りあげました。これが「元禄文化」と呼ばれるものです。江戸時代の文化の中では元禄文化が最も華やかなものでした。

元禄文化は、とくに上方（大坂）の町人が文化の担い手になり、江戸期を代表する文化になりました。井原西鶴の

浮世草子（小説）、近松門左衛門の浄瑠璃・歌舞伎をはじめとして、松尾芭蕉の俳諧（俳句）や菱川師宣の浮世絵、また、染色・陶磁などの工芸、詩歌、音曲（音楽）といったさまざまな分野で文化が花開き、庶民にも広く普及しました。

印刷技術も進歩し、出版業が活発化しました。中国や日本の古典のほか、「草子」と呼ばれる大衆図書が好んで読まれました。「和算」（日本独特の数学）も盛んになりました。

こうした文化の充実は人々の心に潤いを与えていきます。とくに、近松が取り組んだ浄瑠璃は、人間らしく生きようとする人々の喜びや、悲しみ、苦しみが見事に描かれ、観る人に大きな感動や共感を与えました。たとえば、正徳五年（一七一五）大坂竹本座での『国性爺合戦』は大人気で、十七カ月余りの長期興行となりました。近松の流れるような文体を基に、義太夫節の語り、三味線、巧みに動く操り人形が一つになった演技が多くの人の心を打ったのでしょう。

『庭訓往来』（鯖江市資料館所蔵）
時候のあいさつ文が記された文例集で、広く武士から庶民まで重宝された。寺子屋などでは教科書として用いられていた。

三、三大文豪の活躍

井原西鶴・松尾芭蕉・近松門左衛門の三人を、元禄三大文豪と呼びます。そこで、ここでは井原西鶴と松尾芭蕉について書いておきます。

井原西鶴（一六四二～一六九三）は、大坂の生まれです。四十歳の時に発表した『好色一代男』が好評をえて、その後、『好色二代男（諸艶大鑑）』・『好色五人女』を書き、町人たちの生活や当時の風俗をいきいきと描写しました。また、元禄元年（一六八八）には『日本永代蔵』を発表し、身近な町人たちの経済生活を描き、永く大衆に支持されました。その後、浮世草子の手本として多くの影響を与えていきました。

また、松尾芭蕉（一六四四～一六九四）は伊賀国上野（現在の三重県上野市）の生まれです。三十四歳のころ、俳諧の師匠として独立し、延宝八年（一六八〇）には住居を江戸深川に移しています。門人が、庭に芭蕉の株を植えたことから、こ

の住居のことを「芭蕉庵」と呼び、「芭蕉」の俳号を用いるようになります。

芭蕉の句は、自己の生活の中に「わび」「さび」（落ち着いたおもむきのこと）の世界を表現しました。また、芭蕉は人生を旅ととらえ、『野ざらし紀行』や『奥の細道』など多くの紀行文を残しています。なお、芭蕉は『奥の細道』の旅で、越前にもきています。その時期は元禄二年（一六八九）八月で、金津から福井、永平寺に参詣したあと、麻生津、鯖江、武生を経て、敦賀に向っています。

芭蕉も通った「旧北陸道」の図（鯖江市資料館所蔵）

四、人形浄瑠璃と歌舞伎

人形浄瑠璃というのは、浄瑠璃の語りと、三味線（しゃみせん）、それに操り人形とが結びついた総合演劇です。江戸時代に入って上方で普及し、元禄期に竹本義太夫が出て流行しました。京都や江戸・大坂の芝居小屋では人形浄瑠璃や歌舞伎などが盛んに演じられていました。

近松の浄瑠璃作品は百編を超え、これらは「時代物（じだいもの）」と「世話物（せわもの）」に大別されます。「時代物」というのは、歴史上の出来事・事件や伝説をヒントにした作品で、英雄なども登場します。「世話物」は身近な町人の姿を簡潔な形式で表現したものです。

江戸時代には歌舞伎もおおいに流行します。元禄時代に入ってからの歌舞伎をとくに「元禄歌舞伎」と呼びます。有名な市川団十郎（いちかわだんじゅうろう）や坂田藤十郎などの人気役者が活躍し、数多くの新作が上演されました。元禄歌舞伎の世界でもきわだっていた

のが近松です。近松は『傾城壬生大念仏』や『一心二河白道』などおよそ三十点の作品を発表しています。近松四十歳（数え年で四十一歳）から十年間の活動は、歌舞伎作品の執筆に重点がおかれ、元禄歌舞伎の中心的な担い手として、大きな役割を果たしました。

ふるさと越前を舞台とした作品（浄瑠璃の『傾城反魂香』や歌舞伎の『傾城仏の原』など）をはじめとして、今日でも多くの近松作品が演じられ、人々に感動を与え、親しまれています。

近松作『夕霧阿波鳴渡（吉田屋の段）』〔尼崎市提供〕

第四章　近松をめぐる人々

一、一条禅閤恵観（一六〇五～一六七二）

一条恵観は後陽成天皇の第九子で、後水尾天皇の弟にあたります。一条家を継いで、一条昭良とも言い、禅門に入った身で関白を勤めたので禅閤とも称します。杉森家系譜には近松について「一条禅閤恵観に仕える」と書いてあります。

恵観の山荘止観亭に現存する杉の戸板には人形芝居の図が描かれていることから、恵観は人形芝居に関心があったと思われます。その恵観に仕えたことで、近松は人形浄瑠璃に興味を持ったに違いありません。

二、正親町公通（一六五二～一七三三）

正親町公通は、日本の古典や有職故実（昔のしきたり）に通じ、優れた絵をかき、作品を多く残しています。とくに狂歌を好み、その作風は日本や中国の古典をもとにして、掛詞（一語に、異なる二つの意味を兼ねるように使われた言葉）を多用し、知的で上品なものが多いといわれています。また、浄瑠璃太夫の宇治加賀掾のために浄瑠璃を作っていました。近松はその使いをしているうちに、浄瑠璃作者になったという逸話も残っています。

三、宇治加賀掾　浄瑠璃太夫（一六三五～一七一一）

宇治加賀掾は、紀伊国（現在の和歌山県）の紙商の子で、十六歳のときに謡曲や狂言・舞曲などを学びました。伊勢（現在の三重県）で人形芝居を行い、浄瑠璃を語っていましたが、延宝三年（一六七五）京都四条河原で芝居小屋「宇治座」をひらき、宇治嘉太夫を称するようになりました。また、同五年（一六七七）には

朝廷から掾号を賜り宇治加賀掾となりました。

宇治加賀掾の芸風は、繊細で上品であったといわれ、浄瑠璃の語りに音楽性を取り入れました。また、人形やその衣装にも工夫をこらすなど、常に新しさを求める芝居を行い、成功をおさめました。近松と協力してすぐれた浄瑠璃作品を生み出し、歌舞伎役者の坂田藤十郎とも親しく交わるなど、演劇の世界に果たした功績は大きいといわれています。

四、竹本義太夫　浄瑠璃太夫（一六五一～一七一四）

竹本義太夫は摂津国（現在の大阪府）の農家の生まれで、早くから浄瑠璃を好み、大音で、はっきりした語り方であるという恵まれた素質を持っていました。上方浄瑠璃の第一人者井上播磨掾の芸風をしたい、家業を捨てて浄瑠璃界に入ります。初舞台は延宝四年（一六七六）ごろで、同五年（一六七七）には京都の宇治

座に出演して宇治加賀掾のワキ（主人役の相手）を語っています。同八年（一六八〇）ごろから竹本義太夫と名乗るようになりました。

貞享元年（一六八四）に竹本座を創立し、近松の旧作『世継曽我』を語って大評判になり、義太夫の人気は不動のものとなります。この後「義太夫節」は浄瑠璃の主流となりました。そして、元禄十一年（一六九八）正月以前に朝廷から掾号を賜り、竹本筑後掾と称しました。

竹本筑後掾肖像
（大阪市立博物館所蔵）

五、辰松八郎兵衛　大坂竹本座の人形遣い（生年不詳～一七三四）

辰松八郎兵衛は、女形人形遣いの第一人者と呼ばれる人物です。近松との関連では『曽根崎心中』の「大坂三十三所観音廻り道行」で操った手妻人形（からくり人形）で有名です。後に江戸へ出て、「辰松座」を興し、操り人形をひろめ人気を得ました。

六、竹田出雲　大坂竹本座の座本　浄瑠璃作者（一六九一～一七五六）

竹田出雲は、大坂道頓堀のからくり芝居の興行師であった初代竹田近江の子とも、弟ともされています。宝永二年（一七〇五）竹本座の新座本となりました。近松の才能を十分に引き出し『用明天王職人鑑』を上演します。これから演技者・竹本義太夫、座付作者・近松、経営者・竹田出雲という三人体制が確立されまし

た。以来、竹田出雲は舞台と人形の改良に力を尽くし、後には近松の添削を受けたりするなど、浄瑠璃作者としても竹本座を支えました。竹田出雲によって近松は竹本義太夫と並ぶ地位を得て作者活動に専念できました。

『役者万年暦』（京之巻）にみえる坂田藤十郎
（早稲田大学演劇博物館所蔵）

七、坂田藤十郎　歌舞伎役者
（一六四七～一七〇九）

坂田藤十郎は、祖先は越後国（現在の新潟県）の出身で、父は京都で座本を勤めた坂田市左衛門といわれています。延宝四年（一六七六）の役者評判記では都万太夫座四天王の一人と呼ばれ、京都中の期待通り、人気を得ていきます。

元禄十二年（一六九九）の近松作品『傾城仏の原』での主役が好評で、京都の立役の第一人者となります。藤十郎は近松の意見を尊重しながら芝居をつくり、近松もまた藤十郎のために三十近い歌舞伎作品を書きました。藤十郎は円熟した芸を見せましたが、元禄十四年（一七〇一）に座本を退いた後、大和山甚左衛門にその芸を伝え、宝永六年（一七〇九）に亡くなりました。

特別寄稿

近松ってどんな人？——辞世文から——

園田学園女子大学 近松研究所

近松門左衛門は武士の子として越前福井で生まれました。その近松が上方で芸能界に入り、過ごした一生を振り返って、死の半月ほど前に書いた自筆の辞世文が残っています。代々の武家に生まれながら、それを継がず、公家に仕えながら、位を得ず、と、芸能界に入る前の時代—幼少年・青年時代—からさらりと記し始め、「——だが……」という形で、芸能界に入った以後を、徹底しきれないまま「口に任せ、筆に走らせ、「囀りちらし」た一生と振り返り、「世のまがいもの」と言い捨てるのです。そして、死に際して、「一字半言」も言うことがなくて当惑している、あやうい人生だ、と締めくくります。その後に、「もし『辞世は？』と問う人があるならば」として記される歌に、作者近松の一生が凝縮されているように思います。

それぞ辞世 去ほどに扨もその丶ちに残る桜が花し匂はゞ

それこそが辞世なのだ、と力強く言い切ります。「それ」とは何でしょう？「去ほどに」「扨もその〻ち」とは浄瑠璃作品の冒頭の定型句です。「桜」は、浄瑠璃作品を本として印刷する時に使う版木の材料となる木です。つまり、「去ほどに」、あるいは「扨もその〻ち」という定型句で語り出される作品が「桜」の版木で刷られ続け、人の心を慰める花のように残るならば、その作品こそが私の辞世である、と言うのです。

死に際して、「一字半言」も言うことがない、と言ったのは、なぜなら私の一生のすべては作品にあるからだ、ということでしょう。

実は、この辞世文には草稿（下書き）が残っています。そこでは、この歌は「それよ辞世扨もその〻ち数々に残す桜の花し匂はゞ」となっています。草稿での「残す」が最終的には「残る」となっていることに着目するならば、自分が「残す」のではない、人々が私の作品に親しんで好んでくれる結果として作品が「残る」ならば、という謙虚さがうかがえます。作品こそが私のすべてだ、と言い切る一方での、この謙虚さは、草稿にはない、完成文に添えられたもう一首の歌でも示されています。

残れとは思ふも愚か埋み火の消ぬ間あだなる朽ち木書きして

「残れ」「朽ち木書き」の語が前の歌と対応していることはわかるでしょう。「残る」なら、と言ったが、そう思うのも愚かなこと、私のしてきたことは、わずかの間に消えてゆくむなしい「朽ち木書き」（その時その時で消えてゆくはかない作品の執筆）だったのだから、と言うのです。これは、「大きなことを言いすぎた」ということに対するトーンダウンでは、決してないと思うのです。

浄瑠璃作品とは、劇場・舞台で演じられてこそ、はじめて存在するものであり、そのためには演じ手がいて、それを受けとめる聴衆・観客がいる、そして、それはその場かぎりのものである、という自覚があったと思われます。近松の観客に対する態度は、ただ一点。歴史上の出来事や伝説、あるいは町中での事件など、時代や場所、人物などの題材は何であれ、浄瑠璃を聴きに劇場に足を運んでくれる観客に、少なくともその間は「慰み」を与える、ということです。そのためにはどうすべきか、を問い続け、実践してきた作者です。浄瑠璃の文章は、人間とは違う人形を活かすための文章、耳で聴き、時間とともに消えてゆく言葉、だから、文章に「情」を込めることが肝要だと悟り、そのことを第一に、心を砕いてきたのです。

だからこそ、その作品は、その場で人形の動きを見ながら聴く人の慰みにはなるが、後世には意味を持たないかもしれない、というあきらめ・思い切りと、人間が人間としてあるかぎり、時を超えて共有できる慰みとして残ることもあろう、という期待・自信との、相反（あいはん）する思いがあったのだろうと思います。

近松という人は、浄瑠璃において専業の作者という地位を築き、作者として生き、作者として一生を終えた人、近松の言葉を借りるならば、「それぞ辞世」と言い切れる作品を残した人、いえ、「それぞ辞世」と言っておかしくない、後世に残る作品を書き続けた人だと思いますが、そこに注ぎ込まれたであろう、自己の生い立ちや体験・見聞については、多くを語り残していません。やはり、近松が言うように、残った作品こそが近松。「埋み火」はまだ現代でも消えず、「木」も「朽ち」ていないのではないでしょうか。作品をていねいに、謙虚に読んでいくことが、近松さんを知る唯一の、堅実（けんじつ）な方法なのかもしれません。

［文責・井上　勝志］

近松を知るために

【作品、辞典・事典】

高野　正巳	近松門左衛門集 上・中・下	朝日新聞社	昭和二十五～二十七年
重友　毅他	近松浄瑠璃集　上・下	岩波書店	昭和三十三・三十四年
諏訪　春雄	近松世話浄瑠璃集 一・二	角川書店	昭和四十五・五十一年
森　修・鳥越　文蔵他	近松門左衛門集　一・二	小学館	昭和四十七・五十年
高野　辰之	近松歌舞伎狂言集　上・下	臨川書店	昭和四十八年
守随　憲治	近松世話物集	旺文社	昭和五十一年
藤井　乙男	近松全集　一～十二	思文閣	昭和五十三年
原　道生	近松集	尚学図書	昭和五十七年
森　修・鳥越　文蔵	近松門左衛門集	小学館	昭和五十九年
近松全集刊行会	近松全集　一～十七	岩波書店	昭和六十～平成六年
信多　純一	近松門左衛門集	新潮社	昭和六十一年
松崎　仁他	近松浄瑠璃集　上・下	岩波書店	平成五・七年
鳥越　文蔵他	近松門左衛門集　一～三	小学館	平成十一・十二年

上田　万年	近松語彙	冨山房	昭和五十一年
藤野　義雄	近松名作事典	桜楓社	昭和六十二年

【入門書・研究書】

河竹　繁俊	近松門左衛門	吉川弘文館	昭和三十三年
広末　保	増補　近松序説	未来社	昭和三十八年
森　修	近松門左衛門	三一書房	昭和四十六年
諏訪　春雄	近松世話浄瑠璃の研究	笠間書院	昭和四十九年
大久保　忠国	近松	角川書店	昭和五十年
日本文学研究資料刊行会	日本文学研究資料叢書　近松	有精堂出版	昭和五十一年
中村　幸彦他	近松門左衛門の世界	大東急記念文庫	昭和五十一年
松崎　仁他	シンポジウム日本文学　近松	学生社	昭和五十一年
向井　芳樹	近松の方法	桜楓社	昭和五十一年
守随　憲治他	増補国語国文学研究史大成　近松	三省堂	昭和五十二年
諏訪　春雄他	近松門左衛門	集英社	昭和五十四年
河竹　登志夫	近松門左衛門	さ・え・ら書房	昭和五十七年
高野　正巳	近松　文学と芸術	赤坂書院	昭和五十八年

井口　洋	近松世話浄瑠璃論	和泉書院	昭和六十一年
大阪女子大学国文学研究室	上方の文化 近松門左衛門をめぐって	和泉書院	昭和六十三年
鯖江市教育委員会	近松門左衛門と鯖江	鯖江市	昭和六十三年
鳥越　文蔵	虚実の慰み　近松門左衛門	新潮社	平成元年
鯖江市教育委員会	近松門左衛門の研究	鯖江市	平成元年
鳥越　文蔵他	近松への招待	岩波書店	平成元年
森　修	近松と浄瑠璃	塙書房	平成二年
信多　純一	近松の世界	平凡社	平成三年
諏訪　春雄他	論集近世文学1　近松とその周辺	勉誠社	平成三年
武井　協三	江戸人物読本　近松門左衛門	ぺりかん社	平成三年
原　道生	新潮古典文学アルバム 近松門左衛門	新潮社	平成三年
講座元禄の文学四	元禄文学の開花三 近松と元禄の演劇	勉誠社	平成五年
白方　勝	近松浄瑠璃の研究	風間書房	平成五年
近松研究所	近松研究の今日	和泉書院	平成七年
岩波講座「歌舞伎・文楽」八	近松の時代	岩波書店	平成十年
近松研究所	近松の三百年	和泉書院	平成十年

さばえ近松倶楽部　近松ものがたり―鯖江発―　鯖江市　平成十二年

近松関連年表

●は近松自身に関する事項、●は近松の家族に関する事項、を表す。

	近松年齢（満）	
慶長五年（一六〇〇）		関ヶ原合戦。
		福井藩成立。初代藩主結城秀康、石高六十八万石。
		江戸幕府成立。
八年（一六〇三）		大坂夏の陣。福井藩兵一番乗りし、大手柄。
元和元年（一六一五）		丹生郡吉江を中心に吉江藩成立。藩主は松平昌親、石高二万五千石。
正保二年（一六四五）		近松、吉江藩士杉森信義の次男として福井で出生。
承応二年（一六五三）	出生	幼名次郎吉、元服後信盛。通称平馬。
明暦元年（一六五五）	二歳	松平昌親が、吉江藩に初入封、杉森信義もこれに従う。
		杉森一家も吉江に入る。
寛文元年（一六六一）		福井藩、日本で最初の銀札（藩札）を発行。
四年（一六六四）	十一歳	信義が吉江藩に仕えていたことが確認できる。
		これ以後、父が浪人し、一家は京都へ移住。
		信盛は一条禅閤恵観などの公家に仕える。

十一年（一六七一）　十八歳　俳句集『宝蔵』に信盛の名で一句入集する。
延宝二年（一六七四）　吉江藩が廃藩。
八年（一六八〇）　徳川綱吉、五代将軍となる。
天和三年（一六八三）　三十歳　近松作『世継曽我』が宇治座で上演。
貞享元年（一六八四）　竹本座旗揚げ、竹本義太夫『世継曽我』を語る。
三年（一六八六）三十三歳　『佐々木大鑑』にはじめて「作者近松門左衛門」と署名。
四年（一六八七）三十四歳　生類憐みの令発布。
父信義没（六十七歳）、京都本圀寺に葬る。
（これ以前、兄智義没（三十四歳）、本圀寺に葬る。）
元禄二年（一六八九）　松尾芭蕉が『奥の細道』の旅に出発、越前に来る。
六年（一六九三）　井原西鶴没（五十二歳）。
七年（一六九四）　松尾芭蕉没（五十一歳）。
十二年（一六九九）四十六歳　役者評判記『鋸末（おがくず）』に「狂言作者　近松門左衛門」と載る。
十五年（一七〇二）　赤穂浪士の討ち入り。
十六年（一七〇三）　五十歳　曽根崎の森でお初・徳兵衛心中事件。すぐに大坂竹島座で歌舞伎化。
竹本座でも近松作『曽根崎心中』を上演。
宝永三年（一七〇六）五十三歳　近松、この年、京都から大坂に移住する。

宝永六年（一七〇九）　徳川家宣、六代将軍となる。
　　坂田藤十郎没（六十三歳）。
正徳元年（一七一一）　宇治加賀掾没（七十七歳）。
　三年（一七一三）　徳川家継、七代将軍となる。
　四年（一七一四）　竹本筑後掾没（六十四歳）。
　五年（一七一五）六十二歳　竹本座近松作『国性爺合戦』で十七ケ月の長期興行。
享保元年（一七一六）六十三歳　弟岡本一抱没。
　　徳川吉宗、八代将軍となる。この頃、江戸で義太夫節流行。
　　母死去、尼崎広済寺で法要を営む。
　五年（一七二〇）　鯖江藩成立。初代藩主は間部詮言、石高五万石。
　七年（一七二二）六十九歳　近松、知人への手紙で体の衰弱を訴える。
　八年（一七二三）　享保改革の一環として心中物読売の禁止令。
　　心中物の出版・上演の禁止令。
　九年（一七二四）七十一歳　竹本座『関八州繋馬』、近松最後の浄瑠璃となる。
　　大坂大火、竹本・豊竹両座ともに類焼する。
　　近松、辞世文を書く。

九年十一月二十二日

近松門左衛門没（七十一歳、数え年で七十二歳）。
尼崎広済寺、大坂谷町法妙寺に葬る。
法名「阿耨院穆矣日一具足居士」。

あとがき

平成十二年三月に発刊しました『近松ものがたり―鯖江発―』を補完するものとして『ちかまつうるる読本』全三巻を発行することになりました。この冊子はそのうちの第二巻にあたるもので、近松を知る本としました。

さばえ近松（ちかまつ）倶楽部では、近松に関するさまざまな活動をすすめていますが、近松文学を難しいものとせず、一人でも多く近松愛好家が増えていくことを望んでいます。

この冊子ではできるだけやさしい言葉を使用し、近松の歩みを記してみました。また、巻末には参考文献を載せておきましたので、もっと勉強してみたい人は、ここに載っている本を読んでほしいと思います。

編集にあたり、園田学園女子大学近松研究所水田かや乃、井上勝志の両先生の懇切なご指導をいただき、玉稿でこの本を飾っていただきました。また、

福井大学教授三好修一郎先生にはさばえ近松（ちかもんくん）倶楽部顧問として献身的なご指導をいただいております。ここに、ご指導をいただきました諸先生方に厚くお礼を申し上げる次第です。

写真は尼崎市国際文化室、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、天理図書館、大阪市立博物館、石川県杉森唯智氏、岩波書店、集英社、福井県立図書館（松平文庫）、鯖江市中野町から提供をいただきました。付記して感謝申し上げます。

最後になりましたが、冊子編集について企画の段階から近松研究所長松平進先生に種々ご相談申し上げておりましたが、先生は冊子の完成をみず、平成十二年十二月逝去されました。心からご冥福をお祈り致します。

平成十三年三月

さばえ近松（ちかもんくん）倶楽部

近松の情にふれあうまち 鯖江

「ちかまつうるる読本」
ザ・近松 ～鯖江発～ 第2巻『近松を知る』

平成13年3月 発行
監修 ―――― 園田学園女子大学近松研究所
編集・発行 ―― さばえ近松 倶楽部
鯖江市教育委員会 文化課
福井県鯖江市西山町13-1
〒916-8666 電話 (0778) 51-2200
デザイン・印刷 ― 株式会社エクシート

この本は再生紙を使用しています。